厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）

分担研究報告書

シナジー・プログラム日本版作成のための研究

研究分担者　内山　登紀夫　福島学院大学　福祉学部　副学長　教授
鈴木　さとみ　福島学院大学　ふくしま子どもと親の
メンタルヘルス情報・支援センター 特任講師

研究要旨

本研究では，強度行動障害のある人々の支援者のマインドセット（無意識の思考・行動パターン，固定観念や思い込み）と行動に焦点を当てた「シナジー・プログラム」を日本に導入することを目指し，同プログラムを開発した英国バース大学心理学部応用自閉症研究センターのリチャード・ミルズ博士の協力を得つつ日本語版プログラムを作成し，ならびに同プログラムを日本の状況に適した形で導入するため，我が国における強度行動障害のある人々の支援者のマインドセットとストレス，緩衝要因の関連性を定量的手法により明らかにすることを目的としている．

研究１年目である本年度は，リチャード・ミルズ博士による３編の研修・講義動画の翻訳及び字幕つけを行いオンライン上で公開できるようにし，また，定量調査の準備として文献調査を行った．

A．研究目的

本研究では,強度行動障害のある人々の支援者のマインドセット（無意識の思考・行動パターン，固定観念や思い込み）と行動に焦点を当てた「シナジー・プログラム」の日本への導入を図ることを目的としている．同プログラムは心理学的・生理学的理論から導き出されたエビデンス（シナジー理論）に基づく実践に根拠づけられており,福祉分野におけるリーダーとしての資質の開発を助けるものである.支援する側と支援される側がより良い健全な関係を構築するためには，支援者側が，職業上の生理的・心理的要因の影響を理解し,理性的な対応がとれることが重要である（Richard M ＆ Michael M:2018).

また，シナジー・プログラムを日本の状況に適した形で導入するため，我が国における強度行動障害のある人々の支援者のマインドセットとストレス，そしてストレスを軽減させる緩衝要因の関連性を定量的手法により明らかにする．

以上を通して，日本版の研修プログラムを作成する．

B．研究方法

１年目は，同プログラムを開発した英国バース大学心理学部応用自閉症研究センターのリチャード・ミルズ博士を招聘し，日本の強度行動障害支援者（メンターとなり得る 40～60 名程度）にシナジー研修を実施し，情報交換を行う．受講者にアンケート調査と効果測定の試行版を実施し，日本での研修プログラムの作成の参考とする．強度行動障害のある人々の支援者のマインドセットとストレス，緩衝要因に関する文献調査を行う．

２年目は，シナジー・プログラムの実践現場を訪問し，具体的な実施方法と効果測定の方法について情報交換を行い，日本語版の研修プログラム試行版を作成する．また，支援者 10～20 名程度に支援者のマインドセットとストレス，緩衝要因それぞれの関連性についてインタビュー調査を行う．

３年目は，２年目に作成した研修プログラム

を日本の支援者10～20名程度を対象に実施し，参加者らと意見交換を行い日本版のシナジー・プログラムを作成し，100名程度の支援者を対象にシナジー・プログラムを実施する．また，日本の支援者のマインドセットやストレス及び緩衝要因を明らかにするため，定量的調査を行う．

C．研究結果

本年度はシナジー理論について理解を深めるため，（1）同プログラム開発者の一人であるリチャード・ミルズ教授と意見交換を行い，研修・講義の準備をし，（2）文献調査を実施した．

（1）研修・講義の開催直前にミルズ氏が急病のため来日が叶わなくなったため，その代替として研修内容を短縮したオンライン講義を依頼し，研究班で講義資料の翻訳と動画の字幕つけを行った．現在，支援者向けに公開準備をしている．

講義動画は①「Behaviours of concern：懸念される行動」，②「Synergy-short practice workshop:シナジー短縮版ワークショップ」，③「Audit SPELL：SPELL監査」の３編で，概要は以下の通りである．

① Behaviours of concern：懸念される行動（60分）

近年，英国やギリシァなどの欧州や豪州において，知的障害や自閉症を伴う方にしばしばみられる反復的な自傷や他害といった行動障害の用語については，従来用いられてきたChallenging Behavioursではなく，Behaviours of concern（懸念される行動）が用いられている．

本講義では，「懸念される行動」への個人の対応を決定づける心理的メカニズムについて解説している．強度行動障害のある人々の「懸念される行動」に対する支援者のストレス，感情的反応，それに基づく誤った判断によって悪循環が生まれさらなるストレスが引き起こされる．支援者が自身の感情的反応とその副作用に気づき，理性的反応に基づく適切な行動に変容できるよう支援者を支援するための具体的手法を既存の心理学および社会学理論によって説明している．

② Synergy-short practice workshop:シナジー短縮版ワークショップ（120分）

Oxford Dictionaryによれば，Synergyとは，「the extra energy, power, success, etc. that is achieved by two or more people or companies working together, instead of on their own（個人や企業が単独で取り組むのではなく，協力して働くことで達成される追加のエネルギー，力，成功など)」と定義されている．

シナジー・プログラムは，2013年にAT-Autism（ロンドン）とLaskaridis Foundation（ピレウス，ギリシャ）の協力の下に開発され，当初は「問題行動」を理由にギリシャの学校から排除された子ども（自閉症や知的障害，メンタルヘルスの課題のある子どもや難民）への対応として始まった．シナジー・プログラムは主として，以下を目指している．

- 「懸念される行動」に対する，安全で，倫理的，かつ効果的なアプローチを提供する
- 危害を及ぼすナラティブ（物語）の信じ込みと思考習慣を阻止し，それに立ち向かう
- 集団からの排除や虐待，拘束的，つまり処罰的な慣行を阻止する
- 地域社会の受け入れ能力と専門的技能の育成とサポート
- 困難を抱えやすい人々と，彼らを支える者たちのストレスの軽減

実際に，ギリシャの学校60校，オーストラリア，マルタ，イギリスにおいて実施され，第三者評価において，このプログラムは特に自閉スペクトラム症や日常生活上の困難を抱えている子どもたちへの対応と教育実践において教師や支援者の能力向上とストレスレベルの軽減に貢献したと結論付けられている．具体的には，「懸念される行動」を示す生徒の受入れ拡大と効果的なサポート能力の向上，学校関係者や支援者自身の行動の影響に対する自己認識力の向上，子どもの体験について本質的に理解する能力の向上，支援者の傾聴スキルの向上，支援者のストレス軽減，学校文化の変容があげられた（Koulis A., & Bagakis G.,2023)．本講義ではシナジー理論について解説し実践のための演習が行われる．

③　Audit SPELL：SPELL監査（60分）

SPELLは，英国自閉症協会（National

Autistic Society：NAS）が提唱する自閉症のある人々のニーズを理解し対応するためのフレームワークで，５つの基本原則，Structure（環境設定，環境構造），Positive（approaches and expectations）（肯定的なアプローチと期待感），Empathy（共感），Low arousal（穏やか），Links（つながり）の頭文字をとっている（内山ら，2017：NAS,2024）.

SPELL 監査は，自閉症のある人々への支援の質を確保するための SPELL のフレームワークを用いた評価モデル（監査）で，活動の継続的な改善を確実にするための体系的な方法である.

講義では，SPELL 監査の概要と，自閉症のある人々が監査のプロセスに参加する参加型アクションリサーチ（Participatory Action Research：PAR)の重要性，審査フォーマットの適用方法について解説している．SPELL 監査の手法を用いることにより，サービス提供組織の問題点や課題の討議を行う基礎を明確で論理的な手法によって体系的に示すことが可能となる.

（２）文献調査

シナジー理論を支える強度行動障害者支援における支援者のマインドセットとストレス，ストレスを軽減するための緩衝要因の関連性を定量的手法により明らかにするため，今年度は行動障害のある人々の支援者や家族のマインドセット，ストレス及び緩衝要因について Pubmed 及び CiNii を用いて文献調査を行った.

Pubmed で本研究に関連するワードを用いた検索式を作成し検索を行ったところ，ヒット数は３件の重複を除く 55 本であった．これらの論文の内容を検討した結果，本研究に関連する先行研究は 23 件で，内訳はレビュー１件，ケース・スタディ２件，定性調査５件（うち１件はビネットを用いたもの)，定量研究 14 件であった.

日本語の論文検索については，CiNii にて原著論文もしくはレビュー論文を中心に検索したが，本研究の先行研究は見当たらず，関連する論文は２件であった.

D．考察

（１）シナジー・プログラム

シナジー・プログラムの日本への導入を目指し，本年度は，同プログラム開発者の一人であるリチャード・ミルズ博士の講義動画 3 編について翻訳及び字幕つけを行い，オンライン上で公開できるよう準備を進めた．今後は，支援者や保護者等関係者に広く周知し，強度行動障害のある人々への支援方法を再考するための教材として活用したい．来年度は，シナジー・プログラムの実践現場を訪問し，具体的な実施方法と効果測定の方法について情報交換を行い，日本語版の研修プログラム試行版を作成する.

（２）文献調査

行動障害のある人々の支援者の職業性ストレスと負担は，国際的に共通する課題であるが（Ryan C, et al.,2019)，例えば，行動障害のある人々の支援において，支援者が利用者から攻撃的な行動にさらされることが彼らのバーンアウトや感情的消耗，職業上の Well-being の低下と関連するかについては，調査によって結果が異なっていた（Hensel JM et al.,2012：Flynn S, et al.,2018：Klaver M et al.,2021)．また，帰属理論を用いて強度行動障害のある人の行動と支援者への影響を検討した研究（Cudré-Mauroux A.,2010：Rose D et al.,2005）やバーンアウトに対する保護的要因を探索する研究もみられた（Klaver M et al.,2021).

２年目は，これらの文献研究をもとに質問紙を作成し支援者 10～20 名程度に支援者のマインドセットとストレス，緩衝要因それぞれの関連性についてインタビュー調査を行う.

E．結論

強度行動障害のある人々の支援者のマインドセット（無意識の思考・行動パターン，固定観念や思い込み）と行動に焦点を当てた「シナジー・プログラム」の日本への導入を図ることを目的とし，同プログラム開発者の一人であるリチャード・ミルズ博士に３編のオンライン講義（計 240 分）を依頼した．研究班で翻訳と字幕つけを行い，現在，公開準備をしている.

また，文献調査の結果では本研究に関連する先行研究は海外の文献において 23 件，国内では関連する論文が２件であったが，強度行動障害のある人々の支援者のマインドセットとストレス，緩衝要因の関連性や因果関係を示す研究はなかった.

なし

Ｆ．健康危険情報

なし

Ｇ．研究発表

１．論文発表

なし

２．学会発表

なし

Ｈ．知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

３．特許取得

なし

４．実用新案登録

５．その他

なし